

ホメロス 『イリアス』 第三歌

田 中 利 光

そこで各部隊が、指揮する者のもとに整列すると、

トロイア人は喊声を上げて進んでいった、まるで鳥のよう。

ちよūd鶴の叫び声が天空を前に響き渡るよう。

そこで冬の、なんとも凄まじい雨を逃れると

叫び声を上げ、彼等はオケアノスの流れに向かって飛んでいき、

ピュグマイオス人等を殺戮せんものと、

朝まだき無残な戦をしかけていく、その鳥達のように。

一方アカイア人は静かに進んでいった、戦意に息を弾ませながら、

心中お互いに助け合わんと期しながら。

山の峰々に南風が霧を巻き散らすと、

これは羊飼いはまったくありがたくなく、盗人には闇夜よりありがたい、

人が石を投げたぐらいの所までしか見通しがきかない、

その霧のように、進みゆく者達の足もとからもうもうと埃が

立ち上っていくのだった。そして彼等は猛然たるスピードで野を横ぎっていくのだった。

そしてお互い進んで近付いたちよūdその時、

姿、神にも似たアレクサンドロスが、トロイア人の先頭に出て身構えた。

一五

一〇

五

豹の皮、それにたわんだ弓と剣を両肩にかけ、
そして青銅の穂先のついた二本の槍を

振るいながら、アルゴス人のすべての将たちに挑戦するのだった、

一騎打ちの果たし合いで戦おうではないかと。

そこで彼が戦列の前に大股に進んでくるのを

軍神アレースに愛されているメネラオスが目にすると、

獅子が、大きな死骸にぶつかって喜ぶように、

角ある鹿か、野生の山羊のそれを見つけ、

腹を空かせて、むさぼり食らっていて、足速き犬達と

屈強な若者達が追ひ払おうとしても、動じない獅子のように、

メネラオスは姿、神にも似たアレクサンドロスを目にして

喜んだ、不届き者を罰してくれんと思つて。

すぐさま武具を手にして戦車から地上に降り立った。

そこで彼が戦列の前にあらわれたのを

姿、神にも似たアレクサンドロスは目にすると、その胸はうろたえた。

そして味方の群れの中に死を免れようと引き下がっていった。

ちやうど人が山の谷間で蛇を見て、飛びすさり、

離れて手足をぶるぶる振るわせ、

引き下がっていき、頬が真っ青になっているというように、

ちやうどそのように入つていった、堂々たるトロイア人の群がる中に、

アトレウスの子メネラオスを恐れて、姿、神にも似たアレクサンドロスは。

その彼をヘクトルは見とがめ、非難して言った。

「恥知らずのパリスよ、格好だけの男よ、女狂いよ、女誑しよ。

生まれてこなければよかったのに、結婚などせずに死ねばよかったのに。

そうわたしは願ってもいたし、はるかにましなことでもあつたらうに、

そのように馬鹿にされ、ひとから軽蔑されるよりは。

間違ひなく大笑いしていることだろう、髪長きアカイア人は、

格好が良いので、一流の勇者と思つたけれど、

実は勇気も気概もすこしもないではないかと。

そんな男のくせに、同士を集め、

海を行く船で海原を渡り、

異国の人と交わり、遠くの地からよく連れてきたものよ、

美しい女性を、それも強い男たちの家に嫁いでいる人をだ。

おまえの父と町と町びとみんなにとっては大きな災ひ、

敵方にとってはとんだお笑い草、おまえにとっては恥の種。

さあ、立ち向かう気はないのか、アレースに愛されているメネラオスに。

おまえが手にしてる美しい女性がどんな男の妻であつたか知ることになるうが。

キタラの腕前もアプロディーテーから貰つた

その髪もその容姿も役に立つまい、やられて埃まみれになれば。

それにしてもトロイア人は弱腰なことよ。さもなければとづくに

おまえのした限りの悪事のゆえに、おまえは『石の肌を着ていた』だろうに」

そこで彼に答えて言つた、姿、神にも似たアレクサンドロスは。

「ヘクトル、兄上の私に対する非難は正しい、一言もない。

兄上の心はいつも斧のようにしっかりしている。

斧が男の手で木に打ち込まれる、男は巧みに

船材を切り出すだろう、そして斧は男をますます勢いつかせる、

その斧のように兄上の胸の思いは不屈だ。だが、
黄金のアプロディーテーからの嬉しい賜物のことは持ち出してくれるな。
実際神々からの素晴らしい賜物はないがしろにすべきではない。

神々自ら下さるもの、人の方から手に入れるものではないでしょう。

しかし今あくまでも私が戦うことを兄上が望むならば、

他のトロイア人、およびアカイア人全員をその場に座らせて欲しい。

そして中央で私とアレースに愛されているメネラオスを

戦わせて欲しい、ヘレネーと全財産をかけて。

どちらか立ち勝り、勝った者が

全財産と女を得て自分のものにするにしよう。

ほかの者は和平の誓約を誠実に結び、

肥沃なトロイアに住まって欲しい、また彼等は帰るがよからう、

馬を養うアルゴスに、また女が美しいアカイアへ」

このように言った。ヘクトルはそこで大いに喜んだ、その話を聞いて。

そして両軍の間に入り、トロイア人の戦列を押し戻した、

槍の真ん中を掴んで。トロイア人は全員腰をおろした。

彼に向かって髪長きアカイア人は弓を射ようとした。

狙いつけて矢と石を投げようとした。

しかしかの、男達を総べるアガメムノンは大声を上げた。

「ひかえよ、アルゴス人よ、投げるのをやめよ、アカイアの男達よ。

なにか言おうとしている、きらめく兜のヘクトルが」

このように言った。アカイア人は戦いを止め、急に

静まりかえった。ヘクトルは両軍の間に立って言った。

「しっかりと聞いてくれ、トロイア人も脛当てよろしいアカイア人も

アレクサンドロスの言い分を、彼のせいで争いが起こっているわけだが、

他のトロイア人と全アカイア人は、と申し出ている、

立派な武具を、多くのものを養う大地に置き、

自分とアレースに愛されているメネラオスと

二人だけで、ヘレネーと全財産をかけて戦いたいと。

どちらか立ち勝り、勝った者が

全財産と女を得て、持ち帰ればよい、

ほかのものは和平の取り決めをして欲しいと」

このように言った。全員静まりかえっても言う者はなかった。

そこで皆の者に雄叫びすぐれたメネラオスが言った。

「こんどはわたしの言うことも聞いてくれ。一番辛い思いをしているのは

このわたしだ。アルゴス人もトロイア人ももう

引き分けにしてもらいたいとわたしは思っている、さんざん苦しい目にあっているのだから、

アレクサンドロスが先に手だしをし、わたしが争ったので、

われわれのどちらかに死の運命が定まっている、

どちらかが死ねばよいのだ。ほかの諸君はすぐさま引き分けにしてもらいたい。

二頭の山羊、一頭は白く、一頭は黒いのを、

大地と太陽の神に捧げるべく君らには持つてきて貰いたい、われわれはゼウスに捧げる、もう一頭を持つてこよう。

そしてプリアモス殿を連れてきて、直々に誓って貰いたい。

息子らでは傲慢で信用ができない。

ゼウスに誓った誓約に背いて破るかもしれぬ。

若い者の心はいつもふらついている。

年寄りが付き添っていれば来し方行く末を考えて

双方にもっとも良いように計らってくれる」

このように言った。そこでアカイア人もトロイア人も喜んだ、
つらい戦争から解放されたと思つて。

そこで馬を前線にわたつて引き押さえ、自分たちは地上に降りた。
そして武器を脱いだ。武器は大地の上に地面の見える隙間をわずかにして
互いに寄せて置かれた。

ヘクトルは町に二人の伝令を使わすのだった、

すぐにも小羊を運んでくるように、プリアモスと呼んでくるようにと。

つづいてタルテュピオスを王アガメムノンに使わすのだった。

うつるな船に行き、小羊を運んでくるよう

命じるのだった。そこで彼は神にも紛うアガメムノンの命に服した。

他方、イリスは白き腕のヘレネーのもとに使いとしてやつて来た。

アンテノールの子の妻、義理の姉妹に姿を似せて。

アンテノールの子武将ヘリカーオンが妻としていた

ラーオダイケーは、プリアモスの娘たちのうちで容姿もっとも優れていた。

ヘレネーは見ると居間にいた。そして大きな織物を織っていた。

紫色の二重に折った外套で、馬の馴らし手トロイア人と、

青銅の武器を付けたアカイア人との、幾多の戦闘を織り込んでいたのだった、

その戦闘に、彼女のせいで、アレースの手の下で、人々は悩んでいたわけである。

近付いて行って語りかけた、足速きイリスは。

「こちらにいらっしやつてごらんなさい、お姉さま、不思議なことをしていますよ、
馬の馴らし手トロイア人と青銅の武器を付けたアカイア人が。」

これまでは平原でお互い辛い戦をしていたのに、恐ろしい戦争に勇み立っていたというのに。

その人たちが今は静かに座っています。戦闘を止めています。盾に寄りかかり、長い槍はかたわらにつきたてたままです。

一方、アレクサンドロスとアレースに愛されているメネラオスが長い槍を振るって戦おうというのですよ、あなたのことをめぐって。勝った方の妻と呼ばれることにあなたはなるというのですよ」

このように言って、女神は甘く懐かしむ想いをヘレネーの胸に注ぎ入れた、前の夫のことを、また町と両親のことを。

ヘレネーはすぐに白い布をかぶり

部屋を駆け出していくのだった、はらはらと涙をこぼしながら。

一人ではなく、いっしょに侍女が二人あとについていくのだった。

ピッテウスの娘アイトレーとつづらな眼をしたクリュメネーである。そしてすぐさまスカイア門のあるところについたのだった。

人々はプリアモス、パントオス、テュモイテス、

ランポス、クリュテュオス、アレースの裔なるヒケタオン、

それに二人とも聡明なウーカレゴンとアンテノール等

町の長老を囲んでスカイア門のところに座っていた。

老齢のため戦いから離れていたものの、弁舌優れた者達である、

森の中の木にとまり、

玲瓏たる声をした蝉にも似て。

このような、トロイア人の長老たちが櫓の上に座っていたわけである。そこで彼等はヘレネーが皆にやってくるのを目にすると、

声をひくめて互いに翼ある言葉を交わすのだった。

「無理もないことだ、トロイア人と脛当見事なアカイア人が長いこと苦しんでいても、これほどまでの女性のためだもの。

見たところ不死なる女神方に恐ろしいほどよく似ている。

しかしこれほどまでの女性ではあっても、船に乗せて帰らせるべきだろう。われわれにとっても子孫にとっても、後々災いの種がのこらないように」

このように語っていたのだったが、プリアモスは声をあげてヘレネーを呼んだ。

「さあ、私の前に来て座るがよい、愛しい娘よ、

かつての夫の姿も、親戚知人もよく見えるぞ。

まったくそなたのせいではない、神々のせいだとわたしは思う。

神々が引き起こしたのだ、アカイア人の悲しい戦争を。

さあ、名前を覚えてくれないか、あの飛び抜けて大きな男の。

大柄のすばらしい、あのアカイアの勇士は誰か。

確かにあれより頭ひとつ大きいという者ならほかにもいる。

しかしあのように立派な男はいまだ見たことがない、

あのように威厳のある者は。まことに王者のようだ」

彼に女達のうちでとびぬけて美しいヘレネーは言葉を返すのだった。

「おとうさま、恐れ多い思いです。

わたしは惨めに死んでいたほうがよかったです、

息子さんの後に付いて行こうとした時に、夫との床と、親戚の者と、

可愛いさかりの娘と、仲良しの幼な馴染みを捨てて。

しかしそういうことにはなりませんでした。それで涙ながら過ごしてきました。

お尋ねのことにお答えいたしましたよう。

あの人こそはアトレウスの子、広く治めるアガメムノン、立派な王でもあり、力強い戦士でもあります。

恥知らずのわたくしにとつて、義理の兄でした、実を申せば」

このように言った。すると老人は彼に感じ入って声をあげた。

「アトレウスの子はなんと幸せ者か、幸運な男よ、果報者よ、従ってきたアカイアの若者のなんと多いことよ。

かつてわたしも葡萄豊かなプリュギアに行った。

そこで見た、すばやく走る馬を持つプリュギアの男達のなんと多かつたことか。

オトレウス、それに神にも似たミュグドン部隊だ。

彼等はその時サンガリオスの河岸で戦っていた。

そして実はこのわたしは救援に駆けつけ、彼等に加わったのだ、

男まさりのアマゾン人がやって来た時だが。

しかしこの鋭い眼をしたアカイア人ほど多くはいなかった」

次いで二番めにオデュッセウスを見て老人は尋ねるのだった。

「さあ、あの男のことも言ってくれ、わが娘よ、あれは誰か。

アトレウスの子アガメムノンより頭一つ小さいが

肩と胸幅は見たところもつと大きい。

武具は多くのものを養う大地に置いている。

そして自分は雄羊のように兵士らの間を見回っている。

わたしなら彼を、真っ白な羊らの大きな群れの中を歩いていく

充分に発育して、びっしり毛をつけた雄羊にたとえるところだ」

すると彼に答えるのだった、ゼウスを父とするヘレネーは。

「あの方なら、ラーエルテースの子、策に富むオデュッセウス。

育ったところは岩だらけのイタケーですけれども、
あらゆるはかりごとと賢い術策を心得ている方です」

彼女に答えて、賢明なアンテノールは言うのだった。

「奥方よ、そなたの言われたことはまことにその通りです。

これまでに確かにここにやって来ました、神にも紛うオデュッセウスは、
そなたのことで談判に。アレースに愛されているメネラオスもいっしょでした。

二人を迎え、屋敷で接待したのはこの私です。

そして二人の身体つき、賢い術策を知ったわけです。

ちようど、トロイア人が集まり、中に二人が立ち交じると

立ち並ぶ一同よりもメネラオスは肩幅の広さで立ち勝っていました。

二人座るとより貫禄があったのはオデュッセウスの方でした。

ちようど、二人が一同に考えを披露し話し始めますと、

まことにメネラオスの方はよどみなく語るのです。

口数は少ないのですが、実にはつきりとした口調、多弁ではないが
言いよどむこともない。年もオデュッセウスより若かったのですが。

ちようど、策に富むオデュッセウスが立ち上がりますと、

立ったままでした、目を下に据えて上目遣いのまま

杖の前にも後ろにも動かさずに

じつと持ったままでした。うつけ者のようでした。

不機嫌で、そして全くの愚か者と思ったことでしょう。

しかしちようどその時、胸の奥から大きな声を発し、

冬の日に降りしきる雪のように語ったのです。

そうなればもうオデュッセウスにかなうものは他にいないでしょう。

こういうオデユツセウスを見てはその様子を怪しまなくなりました」

三番目にこんどはアイアスを見て老人は尋ねるのだった。

「それでは誰か、あのもうひとりのアカイアの男は、立派な大きな者だ。

ほかのアルゴス人より頭が大きく肩幅が広い男だ」

裾長の衣を着た、女達の中でとびきり美しいヘレネーは彼に答えるのだった。

「あれは、アカイア人の守り手、巨漢アイアスにございます。

そして反対側、クレテ人の間に神のように立っているのが

イドメネウス。そのまわりにクレテ人の武将達が集まっております。

しばしばアレースに愛されているメネラオスは私どもの屋敷で

クレタから来るたびにイドメネウスをもてなしたものです。

今のところ他にも皆、見渡したところ、鋭い目のアカイア人は

よく知っており、名前も言えるのですが、

しかし兵士等の二人の武将が見当りません。

馬の馴らし手カストールと拳闘に優れたポリュデウケース。

同じ母から生まれた、私と血を分けた兄弟です。

麗しいラケダイモンから遠征に加わらなかったのか、

それとも海渡る船でここに一緒にやっては来たが、

今は欲していないのです、男達の戦いに加わるのを、

わたしにまつわるひどい汚辱、恥辱に尻込みして」

このように言った。しかしかれらはすでに、命を生む大地に抱かれていた、

そこラケダイモンで、おのれの父祖の地で。

一方伝令使らは、町の中を神々に誠を誓うしとして運んでいるのだった、

二頭の仔羊を、そして大地の実り、心楽しませる葡萄酒を

山羊の皮袋に入れて。また輝ける混酒器を運んでいくのだった、
伝令使イダイオスは、それに黄金の盃とを。

そして老人に近付いて語りかけて促した。

「お立ち下さい、ラオメドンの御子よ、呼んでおります、

馬馴らすトロイア人の将たちも青銅の武具をよろうアカイア人の将たちも、
平原に下りてきてくださいとのこと、誠の誓いを交わすためです。

そうしてアレクサンドロスと、アレースに愛されているメネラオスが

長い柄の槍で戦うのです、ご婦人を賭けて。

ご婦人と財宝は勝った方のもになるでしょう。

その他の者は和平の誓いを誠実に交わし、

わたしどもは肥沃なトロイアに、このまま住まうことになるでしょう、
彼等は帰っていきませぬ、馬を養うアルゴスと女が美しいアカイアへ」

このように言った。老人は身震いした。そしてまわりの者に命じた、
馬をつなぐようにと。まわりの者はただちに従った。

そこでプリアモスは乗りこんだ。たずなをぐいと引いた。

見事な馬車に、付き添ってアンテノールが乗った。

二人はスカイア門をくぐり、平原に向かって脚速き馬をさしむけるのだった。

しかしそれからちやうどトロイア人とアカイア人のところに着くと、

馬車から、多くのものを養う大地に降りて、

トロイア人とアカイア人の間に進み行くのだった。

すると直ちに男らの王アガメムノンが立ち上がった。

そして策に富むオデュッセウスが立った。続いて伝令使らが

厳かに、神々への誓いの犠牲獣をとり揃え、混酒器で葡萄酒と

水を混ぜるのだった。それから王達の手に水をそそいだ。

そしてアトレウスの子が両手で短剣を抜いた。

その短剣は大きな鞘に収めた剣と合わせて常に下げていたもの。

それで、仔羊の頭から毛を切り取った。続いてそれから

伝令使らはトロイアとアカイアの武將にその毛を配った。

一同見守る中、アトレウスは大声で祈るのだった、両手を上げて。

「父なるゼウス、イーデー山より治めたまい、この上もなく誉れある偉大なる方よ。

そして太陽の神、すべてを見、すべてを聴いておられる方よ。

そして河と大地の神々、そして地下にあつて死者を、

誰であれ、偽り誓ったものを罰しておられる二柱の神よ。

御神々方よ、証人になってください。誓約が誠実に行われるよう見守り給え。

もしメネラオスをアレクサンドロスが討ち取ったら

その場合はヘレネーと財宝すべては彼のものとしましょう。

我々の方は海渡る船に乗って帰ることにしましょう。

一方アレクサンドロスを金髪のメネラオスが討ち果たしたら、

その場合はトロイア人はヘレネーと財宝すべてを返すこと

アルゴス人に対し、しかるべき、後々の人々の間でも

語りつがれるような、なんらかの償いをする事。

もしアレクサンドロスが討たれても、このわたしにプリアモスと

プリアモスの息子らが償いすることを欲しないならば、

そうなれば、このわたしはこれからも戦い続けるでしょう、償いを要求して。

ここに留まるでしょう、戦いの決着がつくまでは」

こう言った。そして子羊どもの喉を非情にも剣で切り裂いた。

二七〇

二七五

二八〇

二八五

二九〇

そして苦しげにあえぐのを地に横たえと、

力を失っていくのだった。青銅の剣が生気を奪っていったから。

一方、一同は葡萄酒を混酒器から盃については

地に注ぐのだった。そして永久に居ます神々に祈るのだった。

アカイア人もトロイア人もだれかれとなくこのように言うのだった

「ゼウスよ、この上もなく誉れ高く大いなる方よ、およびその他の不死なる神々よ。

双方どちらでも先に誓いを破ったならば、

これ、この葡萄酒のように脳漿が地上に流れ出すことになりませうに。

当人らのもその子らのも。またその妻らは他人に仕えることになりませうに」

このように言った。しかしクロノスの子ゼウスにはその祈りを聞くつもりはすこしもなかった。

一同に向かつてダルダノスの裔なるプリアモスは語りかけた。

「聞いてくれ、わたしの言うことを。トロイア人と脛当てよろしきアカイア人よ。

このわたしはもう帰る、風強きイリオスへ。

とてもこの目で見える気にはならぬ、

自分の息子がアレースに愛されているメネラオスと戦うところなど。

ゼウスは知っておられるのだろう、またほかの不死なる神々も、

どちらに死の終わりが決められてしまっているかを」

このように言った、そして子羊のむくろを戦車に載せた、神にも等しいその人は。

それから自分も乗り込むのだった、そしてたずなをしっかりと後ろに引いた。

そして彼の脇にアンテノールが立派な作りの戦車に乗った。

それから二人はイリオスに帰っていくのだった。

一方プリアモスの子ヘクトルと神にも紛うオデュッセウスは

場所をまず測るのだった、しかしてそれから

籤を取って青銅の兜に入れ振るうのだった、

まさしくどちらが先に青銅の槍を放つことになるかと。

兵士達は神々に手をさしのべた、そして祈った。

このようにだれかれとなく言うのだった、アカイア人もトロイア人も。

「父なるゼウスよ、イーデーの山から治めたまう方よ、誉れこの上もなく偉大この上もなき方よ。

両軍の間にこの不祥事を起こしたものがどちらであれ、

その者はよみの家に入り、滅びるようにしたまえ。

しかし我々には、真実を誓い、友好が成就しますように」

このようにその時彼等は言った、そしてきらめく兜をつけた偉丈夫ヘクトルは

顔を後ろに向けて振るうのだった。さっとパリスの籤が飛び出た。

それから一同は列をつくって座るのだった、そこには各人の

脚を高く弾ませる馬と美しい武器が置かれていた。

一方両肩に美しい武器をつけたのは

神にも紛うアレクサンドロス、髪麗しいヘレネーの夫。

まず最初に脚には脛当てをつけた。

銀の踝当てを施した、見事なものだ。

ついでまた胸に胸当てをつけるのだった、

それは彼の兄弟リュカオンのもので、それはびったり身体に合った。

それから肩には柄に銀の鋳を打った青銅の剣をかけた。

それからまた大きくしっかりした盾を。

そして遅しい頭には馬毛のついた見事な作りの兜をかぶった。

おそろしげに飾り毛は垂れ下がって揺れていた。

そして頑丈な槍を手を取った。それは彼の両手にしっくりしていた。

三〇

三五

三〇

三五

同じようにアレースの息に燃えて、メネラオスも武具を身につけていくのだった。

そこで二人がそれぞれの軍勢のがわで、武具をつけると

トロイア人とアカイア人の間に進み出て行くのだった、

恐ろしい目つきをして。馬を馴らすトロイア人と立派な脛当てをつけた

アカイア人は啞然として見入っているのだった。

そして、それから二人は間近に立った、測って決められた場所に、

槍を振りまわしながら、互いに怒りに燃えながら。

そして先にアレクサンドロスが長い影を引く槍を投げたのだった。

そしてアトレウスの子のどこも均整のとれた盾に当てた。

しかし青銅の槍はつき通らなかつた、槍先がへしまがつてしまった、

頑丈な盾に当って。続いて青銅の槍で攻撃をしかけようとしたのは

アトレウスの子メネラオス。父なるゼウスに祈った。

「主なるゼウスよ、わたしに対して先に悪事を働いた、神にも紛う

アレクサンドロスに仕返しさせて下さい。わたしの手で打ち取らせて下さい。

後の世の人間のうち誰もが、客をねんごろにむかえた主人に、

悪事を働くようなまねは慎むことになるでしょう」

このようにその時言った、そして長い影を引く槍を構えて投げたのだった。

そしてプリアモスの子パリスのどこも均整のとれた盾に当てた。

見事な盾を強靱な槍は貫いた。

そして念入りに作られた胸当てを突き破ってしまった。

脇腹をびったりかすめて下着を切り裂いた。

パリスは身をかわして黒い死を逃れた。

そこでアトレウスの子は、柄に銀の鋳を打った剣を抜き

振りかざして兜の嶺を打った。すると剣は嶺に当たって
ばらばらに折れ、手から落ちた。

アトレウスの子は広い天を仰ぎ、うめいて叫んだ。

「父なるゼウスよ、あなたよりひどい神はほかにおりません。

そしてまことにアレクサンドロスの悪事に報いてやっただと思いましたが、
ところがこうしてわたしの手の中で剣が砕け、槍は

手からむなしく飛んで、奴に当て損なってしまいました」

こう言った。そして躍りかかって馬毛のふさふさした相手の兜をつかんだ。

そして向きを変えて、脛当てよろしきアカイア人の方に引き立てようとした。

たくさんの刺繍をほどこした紐がパリスの柔らかい首のねもとを締めつけていた、
顎の下に兜を結わいつける紐がくくりつけられていたので。

そして今や引いてゆき、この上もない名誉を勝ち得たことでもあろう、

この時ゼウスの娘アプロディーテーが目敏く気付かなかつたならば。

女神は屠られた牛の皮ひもを引きちぎった。

するとたくましい手に残ったのは空の兜。

そこでそれを勇士メネラオスは、脛当てよろしきアカイア人の間に

ぐるぐる回して投げた。忠実な仲間達が拾いあげた。

なおも彼はふたたび攻めかかって、青銅の槍で撃ちはたそうと

やっきになった。しかしパリスをアプロディーテーは引きさらった、

いともやすやすと、さすが女神らしく。そして濃い霧で被い隠した。

そして、よい香りのする、香しい寝室に置いた。

そして女神自らヘレネーを呼びに行くのだった。そして高い檜の所にいる

彼女に近付いて行くのだった。まわりにはトロイアの女達が集まっていた。

三六

三七〇

三七五

三六〇

片手でヘレネーの香しい衣装をつかみ、揺すった。

そして年老いた女の姿になって話しかけた。

それは羊毛を梳く老女、ヘレネーがラクダイモンで暮らしていた時

見事に羊毛を梳いてしてくれた。そしてヘレネーは彼女をことのほか慈しんでいた。

彼女の姿をして輝かしいアプロディーテーは話かけたのだった。

「ちよっとこちらに。アレクサンドロスが呼びびです、お屋敷にお戻りになるようにと。

あの方は寢室の見事な寢台の上においでです。

それはもう美しさと衣装で輝くばかり、男と戦って

帰ってきたとは思われないでしょう、これから踊りに

行かれるか、たった今踊りを一休みしてお座りになっているとでもいうご様子」

このように言った。それからヘレネーの胸の内に男欲しさの気持ちをかきたてようとした。

そしてその時そこで女神の美しい首筋と

男心をそその胸元と輝く眼差しに気付くと、

ヘレネーははっとした、そしてそれから言葉を出し、語りかけるのだった。

「まあ、なんというお方でしょう、どうしてそういうことをおっしゃってわたしをたぶらかそうとなさるのですか。

どこかわたしをもっと遠くの、よく住みなされた町々のどこかに連れていこうとされるのですか。

プリュギアとか楽しいメーオニアとか、

そこにも此の世の人の中のだれか、あなたがお気に入りの方がいるとでも。

今、神にも紛うアレクサンドロスにメネラオスが

討ち勝って、忌まわしいこのわたしを家に連れ帰ろうとしているのです。

そこで、今、わたしのところにいらっしゃったのですか、悪巧みを胸にして。

あなたが、あの人のそばに行ってお座りなさるがよい、神の身分はお捨てになつて。

もうオリュンポスへはお戻りにならない方がよろしいでしょう。

ずっとこれから、あの人の世話をし、面倒を見てあげてください。

そのうちあなたを奥さんか召使にでもしてくれるでしょう。

あそこに、このわたくしはまいるつもりはありません 人から非難されるでしょう

あの人の床をととのえになんか。この先トロイアの女達が皆わたしのことをとがめるでしょう。わたしの胸の悩みは尽きないのです」

すると彼女に腹を立てて言うのだった、輝けるアプロディーテは。

「わたしをいらさらさせるのはやめて。強情ね。怒ってもうあなたのことなんかかまってやらないから。これまでは特別に目をかけてあげたけれど、これからは思いきり憎んであげるわ。

トロイア人とダナオス人が、いやというほど憎しみあうように仕組むわよ。

そして両軍の間でひどい目にあつて滅びるのはあなたよ」

このように言った。ゼウスから生まれたヘレネーは恐れた。

輝く白い衣装で身体を被つて黙つてついでに行つた。

トロイアの女達は誰も気付かなかつた。御神が先に立つて行くのだった。

二人がアレクサンドロスの美しい屋敷につくと

そうすると侍女達はすばやく仕事にかかつた。

一方女達のうちでひととき美しいヘレネーは、天井の高い寝室に入った。

すると微笑みを愛でるアプロディーテは、彼女のために椅子を取り、

アレクサンドロスの向かいに運んで置いた。

そこにヘレネー、神の盾を持てるゼウスの娘は座るのだった、

目をそむけて。そして夫をなじつた。

「あなたは戦場からお戻りですが、あそこで亡くなればよかつたのです、力強い男に討たれて。あの人はこの私の前の夫でした。

まことに確かに以前は自慢しておいででしたね、アレースに愛されている

メネラオスに力でも技でも槍でも自分のほうが強いと。

さあ、今、アレースに愛されているメネラオスに挑戦してごらんなさい。

もう一度一騎打ちで戦いなさい。でもわたしとしては、それは

およしなさいと言いますわ。黄金の髪の本ネラオスと

一騎打ちの勝負をして戦うなんて

馬鹿なまねは。すぐにあの方に槍で討たれてしまいますわ」

替わって、ヘレネーにパリスは言った。

「妻よ、きついことを言って、わたしの弱気を責めるのはやめておくれ。

確かにさつきメネラオスが勝ったのはアテーネーがついていたからだ。

しかし今度勝つのはこのわたしだ。われわれにも神々がついてくれるから。

しかしさあ今は二人で床に入って愛を楽しもうよ。

今までにこんなにしたいたい気持ちで一杯になったことはないよ。

おまえをはじめて麗しのラケダイモンから奪って

海を渡る船に乗り

クラナエーの島で寝て交わった時だっただけじゃなかった。

それほど今はおまえが欲しい、甘い気持ちにぼくはなっているんだ」

その時彼はこのように言った。そして先に立って寝台に向かうのだった。妻はついていくのだった。

それから二人は締め紐の穴を穿った寝台に横になった。

一方アトレウスの子は軍勢の間を獣のように歩きまわっていた、

姿、神にも似たアレクサンドロスをどこかにみかけぬかと。

しかしトロイア人のうち誰ひとり、また名だたる援軍のうち誰もできなかった、

そのとき、アレースに愛されているメネラオスにアレクサンドロスを示すことは、

だれか見かけたら、好意からかくまわってやったりはしなかつただろうに。

パリスは彼等すべてから黒い死神のように憎まれていたから。
そこで一同に向かつて、男達を統べるアガメムノンが言った。

「トロイア人、ダルダノス人および援軍の者らよ聞け。

アレースに愛されているメネラオスの勝利は明らかだ。

諸君はアルゴスのヘレネーおよびその財宝を

返還せよ。そしてしかるべき償いをせよ、

後の世の人々の間でも語られるような」

このようにアトレウスの子は言った。そしてほかのアカイア人はそれに賛同するのだった。

第三歌了

北 星 論 集(文) 第 40 号